



WF MOSへのコメント (2)

安藤裕康 (国立天文台)

2008年8月22日

進める際に配慮する点

1. 小さいが新しい挑戦への余地
2. 大学との新しい関係
3. 外国との協力に明確な判断基準

1. 小さいが新しい挑戦への余地

レフェリー得点と論文のインパクトの逆相関

=> 評価が分かれる課題の推進（10%程度）

2. 大学との新しい関係

大学天文台の出現（必然）

- 大型装置建設は大学規模（教育の枠）を越えた
- 人材育成のために中小規模機器開発は必須

大型装置建設 — 大学の新しい関係？

3. 外国との協力を明確な判断基準 (大型装置の場合)

天文学者

(サイエンス、プロジェクト管理)

装置製作

資金源

(自前、持ち寄り、依存)

装置開発の3つの要素

具体的ケース

・ H S C

天文学者 ○
装置製作 ○
資金源 ○

・ W F M O S

天文学者 △
装置製作 ?
資金源 ?

判断基準

リーダーシップ
日本のコントロール下

リーダーシップ
?

装置の位置づけ

- 共同利用装置(facility instrument)
幅広い利用者の存在
3つの要素と日本の管理下にはいっている
- 持ち込み装置(PI instrument)
3つの要素（少なくとも）

(質疑応答 — Q:質問, A:回答, C:コメント — 氏名無しは発表者の発言, 敬称略)

(C) 安藤氏が講演されたような問題を、まさしく、今、ここで話し合うべきではないのか？大型化は天文学の流れだが、きちんと議論すべきだろう。(安藤氏が現在の状況を、幕末日本の鎖国・攘夷から開国の流れに例えたのに対して) 極論ではあるが、インターネットと欧文論文を禁止して、天文学の研究はすべて国内だけで行うという解さえもあり得る。(須藤)